

■バニーエルザはショタの催眠肉便器 六日目

……依頼六日目。

催眠などと偽り、術式魔法を使う少年に囚われて一週間近くが経過したこの日。
エルザは自身の体内で、ある現象が訪れたことを悟る。

(……不味い……！ かなり……危うい時期だ……っ！)

下腹部の熱、術式とは関係なく火照る肉体。
それはエルザの身体……子宮が排卵体勢に入る、所謂『危険日』に突入していることを意味していた。
既に少年からは夥しいまでの精液を注がれ、いつかは受精の感覚すら覚えたが……
今からは更に受精、そして着床……妊娠の確率が高まる。

(このままではいかん……！ 私の子宮を、あんな下衆な小僧に渡してなるものか……！)

現状が続けば、本当に少年の子を孕まされてしまう。屋敷を掃除するフリをし、更に注意深く捜索を続け……
エルザはついに、自分を絡め捕っていた術式の刻印を発見する。
術式魔法は非常に強力な効果を発揮する分、必ずと言っていいほど弱点……術式を解くための条件も同時に発生する。
エルザが術式を解くには、この条件を達成するしかない。
逸早く少年の呪縛から抜け出すため、急ぎ術式を読むが……そこに記されていた解除条件は、驚くべきものだった。

「な、なんだと……？」

(解除には……き……危険日中出しされること……だと……？♥)

術式解除条件。それは危険日に膣内射精されることであった。
信じ難い、そしてあまりに少年にとって都合のいい条件に、エルザは子宮の底から震え上がる。

「こんなもの……どうしろと言うのだ……っ♥」

一度でも膣内射精されれば術式は解けるのだろうが……無論、危険日であるためたった一度でも卵子にとっては致命的なものになりかねない。
また、少年の精力は想像を絶する。危険日でなくとも受精必至の大量濃厚射精。危険日で受けるなど、あってはならないのだ。

(何か……他の条件はないのか?)

絶望的な状況に、別の解除条件がないか探る。すると、別の場所にもう一つの条件が現れた。

「あった！ 条件は……」

そこには、紋様と共にこう記されていた。

『この紋様を見た女性は、以下の催眠暗示を与えられる。
“術者に対し直接的に奉仕する仕事を一定時間行うことでも術式は解除できる、と思いつく”
“あらゆる性的行為を性的行為と感じなくなり、メイドの仕事だと勘違いする”
“自分からメイドの仕事と称して積極的に肉奉仕する”
“この催眠暗示は術者の好きなタイミングで解除できる”』

「催眠だと……？ 一体……なに……を……」

新たな術式解除条件。それを読んだエルザは、一瞬頭がぼんやりするが……すぐに自分がすべきことを理解する。

(……要は、奴に対してメイドらしい仕事を続けなければいいのだろう？
奴がセクハラで妨害していたのもそれが理由か。
危険日中出しなどされて堪るか……！)

とにかくメイド業を実行し続ければ、膣内射精をされずとも術式が解除される。
エルザはすぐ少年の元に向かい、以前も行った個室での授業を開始させる。

【いきなりどうしたのエルザさん？】
「学業の時間だろう？ さあ、授業を始めるぞ♥」

そう言い、くつろいでいた少年を強引に『勉強』させる……



先程エルザが見た術式は両方とも、術式などではなく催眠魔法の一種。
催眠魔法を信じない、という催眠をかけているためか、エルザは催眠魔法を術式魔法だと思っている。
それを逆手にとり、少年は遊び心として術式を模した催眠を施していたのだ。
そして偽りの解除条件により新たな催眠にかかったエルザは、
『授業』と言いつつ少年に跨り腰を振っていた……

ぱんっ♥ じゅぽおっ♥

「ふっ♥♥ んふううっ♥♥ ど、どうだ♥♥ 私のマンコの味はっ♥♥ 女を抱く悦びを学べるだろうっ♥♥」
【うん、スゴくいいけど……エルザさん、依頼主の息子であるボクに騎乗位逆レイプするなんてどうしたの？】
「何を言っているっ♥♥ 私は仕事として授業をしているだけだっ♥♥」
【なんでバニーメイドなのに家庭教師みたいなことしてるの？】

ぱんっ♥ ぐぼっ♥

「依頼主に♥♥ 頼まれたからな♥♥ 以前もっ……こうして♥♥ 教えてやっただろうっ♥♥」

【あー、そうだったね。……で、なんの授業してるんだっけ？】

「お前っ♥♥ そんなことも分からず授業を受けていたのかっ♥♥」

ずっぼおおっ♥♥

「無論っ♥♥ 保健体育に決まっているっ♥♥

いいかっ♥♥ 危険日の女性……今の私のように♥♥ 雄の種漬けで孕むだけが取り柄の牝は♥♥

中出しされると確実に受精し♥♥ たとえ着床せずとも♥♥ 相手の♥♥ ちんぼの虜となるのだ♥♥

女性をちんぼの虜にするなど♥♥ まるで洗脳♥♥ 催眠まがいなこと……っ♥♥

つまり♥♥ 安易な危険日中出しなど♥♥ 決して行ってはならぬ」

ごづうんっ♥♥

「んんほっ♥♥♥ ドスケベええええっ♥♥♥」

少年が下からエルザを強く打ち付ける。危険日子宮が扱られる快楽に、わざとらしく間抜けな牝声を叫んでしまう。

ちなみに、あの術式もどきは危険日にならなければ見つけれられないようになっている。

つまり、読めたということは危険日になったことが確定するのだ。

それを知っている少年は、あと二日となる依頼期間の間に完全な牝奴隷として墮とすため、密かに肉幹に精力を込め、催眠の度合いも強めていく。

【せんせー、今のはテストに出るんですかあ？】

ごづっ♥ ごづんっ♥

「てっ♥♥ テストにはっ♥♥ 出っ♥♥ おいっ♥♥ 今は授業中だぞっ♥♥ もう少し♥♥ 静かにいっ♥♥」

【あ、もういいです、せんせーの意見とか関係なく“出る”んで】

「おまっ♥♥ お前っ♥♥ 人の話をっ♥♥ あへっ♥♥ ちんぼっ♥♥ 膨らんでっ♥♥

んんおおっ♥♥ 出るっ♥♥ 出るううっ♥♥♥」

ドク♥♥ ゴプウウウウツ♥♥

「んををを————っっ♥♥♥

ドスケベええ————っっっ♥♥♥」

少年が何やら発した直後、その逞しい肉幹が一回り膨張し、精力を注ぎ込んだ。

陵辱調教六日目となってもその精力に衰えはない。濃厚で灼けるような熱さが子宮の奥深くにまで一瞬で到達し、それでもなお大量に溢れ出てくる。

そんな射精から危険日卵子が逃れられるはずもなく、エルザは瞬く間に受精絶頂で白目を剥いて絶叫する。

「ほ♥♥♥ おおっ♥♥♥ 危険日卵子っ♥♥♥ 孕んで……っ♥♥♥」

【あー、やっぱり危険日だと一発で孕むんだ？】

「何をとぼけたことを言っている♥♥ そんなことをすれば♥♥

私が孕まされた挙句このちんぼの虜になってしまうだろうっ♥♥

これは性行為ではない♥♥ ただのメイドとしての仕事♥♥ 授業の一環だ♥♥」

【ふーん……？ じゃ、今の『授業』で汚れたから次は『掃除』をお願いね】

「ああ……っ♥♥ す、少し待っている……っ♥♥」

(なんだ……?♥♥ 股間が、妙にベトベトしている……♥♥ まるで中出しされた後のようではないか♥♥
まさか、いつの間にか出されたのか?♥♥ いや、私は授業をしていただけだ……♥♥
ということは……中出しされたと勘違いしてしまうほど、愛液が出てしまったということか……♥♥
認めたくはないが……これも術式が解けるまでの辛抱だ……♥♥)

ただ授業をしていただけのエルザだが、術式による強制発情のせい、秘部からは少年に犯された直後としか
思えないほど白濁の粘液が溢れていた。

実際には犯されてなどいないのだが……ただ授業するだけでこれだけ感じていたことになり、羞恥を感じつつ
『掃除』を始める。

【騎乗位逆レイプの後はフェラ? ボクは掃除をお願いしたんだけど……】

「さっきから何を言っているんだ……さっきのはただの授業♥♥
今から行うのも、ただの掃除だ♥♥ 黙って見ていろっ♥♥」

そう言い、エルザは少年の巨根を指で支え、唇で啜え込む。

「んふううっ♥♥」

じゅぽっ♥ じゅぼ♥ ずぶゆるるるっ♥♥

【へえ～、エルザさんってそんな掃除もするんだね】

「んちゅっ♥♥ じゅぶぶぶっ♥♥ まあな……♥♥ 言っておくが、お前は、んぶっ♥♥
余計なことはしないでいいからな……ずぞぞっ♥♥」

【え～? 手伝おうと思ったんだけどなあ～】

(白々しいことを♥♥ どうせ私に性奉仕でもさせるつもりなのだろう♥♥ そうはいかんぞっ♥♥)

昨日までのように流されてしまえば、またあっさり肉奉仕を強いられてしまう。
少年を突き放す態度をとり、邪魔されぬよう必死に肉竿を貪る。

「んぶっ♥♥ んっ♥♥ んんっふっ♥♥」

じゅぼじゅぼじゅぼおっ♥

「んふううっ♥♥」

【ほんと仕事熱心だなあ……でもちょっと退屈だから、もっと速くやってよ】

「んっ……ひ、ひかたらい……♥♥」

(機嫌を損ねれば、何をするかわからんからな……癩に障るが、仕方ない……っ♥♥)

ずぼっ♥ じゅぼっ♥ じゅぼぼぼおっ♥

「んっ♥♥ んんっ♥♥ んふんむんんんっ♥♥」

(くっ、やはり術式のせいで♥♥ ただ掃除をしているだけなのに……)

まるでちんぽを啜え込んでいるかのように♥♥ 喉が熱くっ♥♥)

【ほら、これも全部『掃除』してねっ!】

ドピュ♥♥ ドプユルルルッ♥♥

「んぶっ♥♥♥ んっ♥♥♥ んぐっ♥♥♥ んっ……………っ♥♥♥」

激しい『掃除』をしていると少年が再び放精。

事前に告げることもない突然の口内射精に、エルザは驚愕しながらも精液を全て飲み干すことで『掃除』を完遂する。

「んっ♥♥ くふ……っ♥♥」

(やはり……ただの『掃除』で♥♥ 口が……喉が♥♥ イッている……♥♥)

【どうしたの？ まさか『掃除』だけでイッてない？】

「そんなことは断じて有り得ん！」

【ふーん、ドスケベ肉便器のくせにがんばってるんだね。じゃ、次はお茶出ししてよ】

「……ああ、わかった……」

(召使いとしてこき使われるのも、腹立たしいな……だが、肉奉仕をするよりはマシか。

今は危険日なんだ……何としてでも、セックスだけは……ましてや、中出しだけは避けなければ……♥♥)

抱かせろ、というような注文をされるよりはマシだ。膣内射精されれば術式が解けるとはいえ、それは最後の手段。

早く解除条件である『一定の時間』を満たせるよう、通常の奉仕を続けていく。

【さっきの掃除もだけど、前にやったのとは違うやり方だね】

「そうか？ まあ……お前には、そう見えるのだろうか……っ♥♥」

エルザは気にせず、『お茶出し』……少年の巨根を胸で挟み愛撫する行為を続ける。

(今度は胸が熱くなってきた……♥♥ ただ普通にメイドの仕事をしているだけだというのに……♥♥)

この状態で犯されでもしたら、受精は免れんぞ……っ♥♥)

快感に苛まされながら『お茶出し』をしていく。だが長く続く『お茶出し』に少年は飽きたらしく、今度は魔法の訓練を頼まれる。

「注文の多い奴だ……」

【イヤなら魔法じゃなくて立ちバックでレイプする訓練をお願いするけど？】

「っ……わかった、魔法の訓練だな……」

犯されるのだけは避けたい。エルザは渋々に胸から巨根を離すことで『お茶出し』をやめ、前屈みになって壁に手をつき、少年に向かって尻を突き出す姿勢になる。

それを見た少年はエルザの背後に立つと、バニースーツをズラして後ろから挿入した。

ずぼおっ♥

「くほっ♥♥」

【魔法の訓練は初日以来だけど、こんな変わった方法もあるんだねー】

ぱんっ♥ ずばあんっ♥

「ふっ♥♥ ふくうっ♥♥ 訓練に……変わったものにも、ないだろう……っ♥♥」

今回の訓練方法は、背面立位……立ちバックで犯させる、というものだ。
エルザにとっては“オーソドックスな”訓練法だが、少年には意外なやり方だったらしい。
だが特別に難しいというわけでもなく、少年もできないというわけではないのでこのまま続行する。

【ま一、確かに訓練の仕方に文句言えないけどさ】

ぱんっ♥ ぱんっ♥ ぱんっ♥ ぱんっ♥

「くっ♥♥ んんんっ♥♥ わ、わかっているなら♥♥ 黙って続けろ……おおっ♥♥」

【ごめんごめん。でも気分良い、っていうか気持ち良いよ。こんな風に訓練してくれて、なんかエルザさんが急に優しくなったみたいで】

ぱんっ♥ ずぱんっ♥

「こ♥♥ これが♥♥ 本来の……仕事♥♥ だからなっ♥♥

こんなのでよければ……っ♥♥ いつでも……やってやるぞっ♥♥」

(犯されるのに比べれば……♥♥ バニー姿であること意外♥♥ 何もおかしくはないからな……♥♥

し、しかし♥♥ ただの訓練なのに……やはり、身体が……っ♥♥)

ずばあんっ♥

「おほっ♥♥」

【あれ、エルザさん、やっぱり仕事するだけでアへってない？】

「誰がアへるか♥♥ これは魔法の訓練なんだぞっ♥♥ 真面目にやらんかあっ♥♥」

【あ、真面目にやっついていいんだ。じゃあボクなりにがんばるね】

「お前♥♥ 今までふざけていたのか♥♥ 魔導の道を舐め」

ぱあんっ♥ ぱんぱんぱんぱんっ♥

「るうほっ♥♥ お♥♥ おっ♥♥ は♥♥ 激しっ♥♥」

【え、なに？ 舐めるなって言いたかったの？ そんなつもりはなかったけどね……っていうかエルザさんへバってきた？】

「お♥♥ お前如きの訓練相手をするくらいで♥♥ 誰がへるものおほおっ♥♥

……っ♥♥ これぐらいなんともないいいっ♥♥」

(いかんっ♥♥ ただの訓練なのになぜか感じてしまうっ♥♥

落ち着け……♥♥ これはただの仕事……単なる魔法の訓練なんだっ♥♥)

これは『仕事』『訓練』……そう自分に言い聞かせ、激しく打ち付ける少年の巨根を迎え撃たんと、踏ん張って尻を突き出し直す。

「私に遠慮するなっ♥♥ 力を一点にしゅ♥♥ 集中して……魔力を打てええっ♥♥」

ごづうんっ♥♥

「おほっ♥♥♥ お♥♥♥ お……っ♥♥♥」

(ダメだ♥♥♥ ただ訓練しているだけなのに♥♥♥ イッ……♥♥♥)

ドビュウッ♥♥ ゴビュルルルルルルルルルッ♥♥

「イグううううううううううううううううう♥♥♥

んんおほっ♥♥♥ 子宮っ♥♥♥ 卵子iiiiiiiiっ♥♥♥」

エルザの指示に従い、少年が巨根の精力を一点……子宮口に向けて激突させる。
更にその勢いのまま強烈な射精を浴びせ、エルザは再び危険日卵子が蹂躪される快楽に悶え苦しむ。

「はっ……♥♥♥ はっへ……♥♥♥」

(まだ♥♥♥ また♥♥♥ ただ仕事をしているだけで♥♥♥

まるで危険日中出しされ♥♥♥ 受精したかのような……っ♥♥♥)

【あれ、やっぱりバテたんですか。もっと訓練して欲しかったんですが……しょうがないなあ、訓練も出来ないならお仕置き種漬けでも】

「ま♥♥ 待てっ♥♥ 動いて少し息が乱れただけだ♥♥ まだヤれるっ♥♥ 私に続けっ♥♥」

(今は犯されるわけにはいかんっ♥♥ 種漬けだけは避けなければっ♥♥)



種漬けさせないため、訓練を続けさせなければならない。

そう思ったエルザがとった姿勢は、少年に背を向け尻を突き出したまま、両手を頭の後ろにつけ、蟹股になる、というものだった。

「さあ♥♥ 遠慮なく突いて来」

ずんっ♥♥

「いひっ♥♥♥」

【じゃ、お言葉に甘えて遠慮なく】

ずんっずんっずんっ♥

「ふっ♥♥ く♥♥ くふうっ♥♥ か、構わんっ♥♥ 本気で来いっ……っひひひひっ♥♥」

(耐えろっ♥♥ 快感を与えられるだけなら♥♥ 問題ないっ♥♥

性行為さえ♥♥ 種漬けさえ許さなければ♥♥ 何の問題も♥♥ 問題もおおっ♥♥)

性交を避けさえすれば、『仕事をするだけで快楽に蕩ける』という辱めにも耐えられる。

恥を忍び、エルザは必死で少年の巨根に蟹股腰振りをぶつけていく。

「ふっ♥♥ ふ——っ♥♥ っお♥♥ くふうう——っ♥♥」

(これはっ♥♥ ただ息が乱れただけっ♥♥ 感じてなどいないっ♥♥

ただの仕事をしている時にっ♥♥ 屈辱種漬けの快楽を感じるなどおおっ♥♥)

【ところでこれ、なんの訓練だっけ】

ずんっ♥ ずばんっ♥

「だから♥♥ 魔力のっ♥♥」

【魔力をどう鍛えてるんだっけ？】

ずぶんっ♥ ばああんっ♥

「私に教えられておいてっ♥♥ そんなこともっ♥♥ わかってないっ♥♥ のかあぁっ♥♥
魔力を集中して♥♥ ぶっっ♥♥ ぶつける♥♥ 訓練っ♥♥」

【あーそうだっけ。エルザさんが種漬けされる時みたいにドスケベな喘ぎ声するから忘れてたよ】

ぱんっぱんっぱんっぱんっ♥

「なっ♥♥ そんな声は出していないっ♥♥ 無駄口を叩く暇があるなら……♥♥」

【じゃーまた必殺技出すよ！ しっかり受け止めてね！】

ずばあんっ♥♥ ずっぼおっ♥♥

「イっ♥♥ いちいち断るな♥♥ 遠慮するなと♥♥ 言ッ♥♥」

ごっづうっ♥♥

「イッ♥♥♥ あ♥♥♥♥」

体験版はここまでです。続きは製品版で！